

## 救世主ハリストス大聖堂と二人の皇帝

——アレクサンドル一世とニコライ一世

### 一・救世主ハリストス大聖堂の二つの計画

クレムリンのほど近く、モスクワの空に巨大な大聖堂の黄金色のドームが輝く（図1）。十字架を含む全体の高さは一〇三メートル、建物の体積は五二万四〇〇〇立法メートル。断面は幅八五メートルの等辺の十字架に近い<sup>(1)</sup>。この救世主ハリストス（キリスト）大聖堂は、もともと、アレクサンドル三世の治世下の一八八三年に完成したが、この場所がソ連時代にソヴェエト大宮殿の建設用地となり、大聖堂は一九三二年に爆破された。その後、大宮殿の建設は頓挫し、跡地はプールになっていった。現在の聖堂は、ソ連崩壊後の二〇〇〇年に再建され



図1 救世主ハリストス大聖堂（2019.3筆者撮影）

池本 今日子

たものである。

本稿が注目するのは、大聖堂のそもそもの建設についてである。二つの計画があつた。一つは、皇帝アレクサンドル一世（一七七七〜一八二五、在位一八〇一〜二五）が認めた最初の計画（一八一七年）であり、建立地はモスクワの中心から外れる雀ヶ丘である。アレクサンドル・ヴィトベルク（一七八七〜一八五五）の設計による。だが、この計画は破棄された。いまひとつは、アレクサンドル三世の治世に前述のように完成したものであり、これは、一八三二年にニコライ一世（一七九六〜一八五五、在位一八二五〜五五）が認めたコンスタンチン・トーン（一七九四〜一八八一）設計のものである。

大聖堂の二つの計画に特化した先行研究としては、建築史家エフゲニア・キリチエンコのものがある。文化史では、リチャード・ウォートマンが権力の表象におけるアレクサンドル一世の精神的要素と、ニコライ一世の表象の民族的要素をそれぞれ示すものの一つとして、この大聖堂を取り上げた。ドミトリー・シドロフは大聖堂の記念碑の歴史に、宗教と国家間の関係の変化を見る。日

本では畠山禎が、ニコライ一世はロシア性を強調し様々な社会層の統合をめざすモニュメント文化を形成したのに対し、アレクサンドル一世の計画は、臣民に配慮しないヨーロッパの聖堂という点で「一八世紀の専制」の継承の表れであつたと見なす。<sup>2)</sup>

同時代の思想家アレクサンドル・ゲルツェンはヴィトベルクの設計を「天才的作品」と賛美する一方、トーンの聖堂を「偽善的」、「時代錯誤的」、「栓の代わりに玉ねぎをのせた五つ頭の薬味入れのような」と批判した。二つの建築の本質に相反するものを見たのである。<sup>3)</sup>

本稿ではこの二つの計画を取り上げ、アレクサンドル一世のナポレオン戦争後の宗教と道徳政策に関する筆者の従来の研究を土台として、大聖堂の計画について改めて検討する。そのために、彼の姿勢をニコライの考えと比べる。筆者は、一七世紀初頭のロシア動乱時代にポランド軍からモスクワを解放するための義勇軍を率いたドミトリー・ポジャルスキーと、資金を集めた商人クジマ・ミーニンの記憶について調査してきたが、トーンの大聖堂の外壁にはこの二人の姿も刻まれた。ニコライ

一二期における二人の表象についても上記の点と関連させつつ考察する。

## 二、アレクサンドル一世とヴィトベルクの計画

ナポレオンとの帝国領内での戦いが迫る一八一二年春、アレクサンドル一世は改革派ミハイル・スペランスキーを国務長官から解任し、愛国的保守派の重鎮アレクサンドル・シシコフを後任に据えた。六月には、ナポレオンが率いるヨーロッパ諸国の大軍「グラランド・アルメ」が国境を越えた。ロシア中核地域へのその侵攻が予想される中、シシコフが作成しアレクサンドル一世が義勇軍への参加を呼びかけた七月六日の声明は、「心に十字架を、手に武器を」と訴えた。貴族ボジャルスキー、商人ミーニン、聖職者パーリツインの名を挙げ、「ロシア人」の「祖国」への貢献と「スラヴ人」としての勇敢さを称えた。前二者と同様に後者アヴラーミイ・パーリツイン（三位一体聖セルギイ修道院執事長）も、動乱期の義勇軍に関与した。三人はロシア民族による敵撃退の

記憶と結びつく。アレクサンドルがモスクワに同時に宛てた声明は、「信仰と玉座と帝国」を救うように訴え、「神と我々の正教会が祝福する正当な戦いの精神」を称えた。彼は主な戦場となる中核地域のロシア人に呼びかけ、その民族的伝統と正教信仰に訴えて彼らの愛国心を鼓舞したのである。<sup>1)</sup>

シシコフは、前年一二月にロシア語愛好者懇話会における「祖国愛に関する考察」と題した講演で、言語と信仰の重要性を説いていた。動乱時代の「多くの全ロシアの忠実なる息子たち」の「熱意と献身」、「団結」を称え、「祖国愛」を鼓舞した。その際、反対に、「自らを世界市民と見なす」ことはいかなる国民にも属さないことを意味し、「人類から抜け出し、獣となること」である、とコスモポリタニズムを痛烈に非難した。彼にとつては、ロシア語や正教会というロシア民族の伝統や文化が、ロシアの国民性にとって重要であった。一方、彼がコスモポリタンを批判した際に念頭にあったのは、ヨーロッパの合理主義改革を推進する当時の国務長官スペランスキーと、暗にアレクサンドル一世である。<sup>2)</sup>

アレクサンドルは、たしかに、コスモポリタンであった。彼がシシコフの手を借りて一八一二年に行つた前述のロシアの民族的要素の強調は、一八一二年におけるロシア中核地域の危機という特殊な状況下に限られた。危機が去ると、彼はきびすを返した。さらに一八一四年にはシシコフを國務長官職から罷免した。<sup>(6)</sup>

一八一五年にアレクサンドル一世が提案しパリで締結された神聖同盟条約は、教派を超えたキリスト教の原則を外交や内政の場に適用するという君主による宣言である。とりわけ、彼が提案した草案は「本質的に一つのキリスト教国家」(第二条)が存在すると述べ、普遍キリスト教的宗教観を強調した。また、他国との外交関係の主体を「臣民」に置き(第一条)、君主制のもとでの臣民の政治参加を示唆した。ここに、治世初期から続く彼の立憲君主制的路線の継続が示されている。<sup>(7)</sup>

その際、「正義と慈愛、平和」というキリスト教の教えが、「人類の諸制度を強固にしその欠点を改める唯一の手段として、諸君主の決定に影響を与え、すべての方策を導くべき」(前文)ものと見なされた。普遍的キリ

スト教の信仰と道徳が、君主に改革を促す上で不可欠にして唯一の方策であるという。一方、臣民にとっては、キリスト教の「原則と義務の履行」に従うことが、「この平和を享受する唯一の手段」である(第二条)。当時、ロシアに限らず、革命フランス及びナポレオンとの戦争により領土と人心は荒廃し、革命に勝利したと安堵した君主たちの改革指向は衰えていた。この状況と考えあわせると、アレクサンドルが草案で示したのは、ロシアを含む全ヨーロッパで普遍キリスト教的な信仰と道徳により戦後の人心を安定させ、過激な意見を穏健化し、平穏な環境を実現すること、その中で君主に立憲主義的な改革を促すという、全ヨーロッパ規模での改革の志であったと理解できる。<sup>(8)</sup>

実際に国内において、彼は一八一二年末に聖書協会を設立し、教派の解釈によらない聖書のほか、神秘主義に関する書物などの流布を促した。協会にはキリスト教以外の宗教の代表者も招待した。一八一七年には、正教会を指導する宗務院を外国宗教庁、国民教育省と合体させ、大臣アレクサンドル・ゴリツインのもとに宗教Ⅱ国

民教育省を設置した。正教会が持つ特別な立場を消失させ、正教に特化せずに宗教と教育の関係を深めることを目指したのである。<sup>(9)</sup>

ナポレオン戦争後にアレクサンドルが建てた記念碑には、このような思想や姿勢が反映されていた。彼は一八一二年の戦争の記念碑をロシアの伝統や民族的イメーヅから離れたところで作った。赤の広場の「市民ミーニンとポジャルスキー公の像」(一八一八年)の二人はローマの戦士の姿であり、ロシア人というより「世界市民」であった。これは、一八一二年から一五年の戦争のコスマポリタンのヨーロッパ的な記念碑であったといえる。また、この像で商人ミーニンが立ち上がり、貴族ポジャルスキーに出陣を促すというミーニン主導の形がとられたことや、寄附者名簿が身分別ではなく、地域別となっていたことなどに、「市民」概念の尊重を見ることができるといえる。この像は、同時代の自由主義的なセミヨン・ポブロフの詩の影響を受けたと考えられる。彼はミーニンを「ロシアのプレブス」、「真のバトリオット」として称賛し、ポジャルスキーよりもミーニンを高く評価してい

た。<sup>(10)</sup>

一八一二年の戦争を記念するものとしてアレクサンドルにとつて何より重要な計画が、雀ヶ丘の救世主ハリストス大聖堂であった。もともとモスクワに救世主の聖堂を建立するという考えは、一八一二年一月半ばにピョートル・キキンがシシコフに手紙で提案し、シシコフがアレクサンドルに紹介したものである。キキンは、「ロシアの心臓」であるモスクワで、「傲慢な敵がロシア国民に致命的な打撃を与えようと期待し」、正教会を冒瀆し、神意により「無数の敵の大軍の破滅が始まった」ゆえに、モスクワに記念碑として教会を建てるべきである、と主張した。敵を駆逐した日に、毎年、聖職者と軍人と正教徒のための祭りをを行うのがよい、とも提案した。ロシア正教会と正教徒を神が救ったことの記念碑としての聖堂の建立計画であることは明らかである。<sup>(11)</sup>だが、一八一二年末からの普遍キリスト教的政策への大転換は、聖堂にロシア的正教会的な色彩を与えなかった。大聖堂を設計したアレクサンドル・ヴィトベルクはスウェーデンから移住した都市民の息子で、元の名をカー

ルといい、帝国美術アカデミーの絵画部門で学び、金メダルを含む多くのメダルを獲得した。一八〇七年に卒業後は寄宿学生としてアカデミーに残り、一八〇九年にはグリゴリー・ウグリユモフ教授の助手となった。理想主義者であったといわれる。<sup>(12)</sup>

一八二二年二月二十五日、アレクサンドル一世はナポレオンの大軍を撃退したことを宣言し、この偉業に神意を見て、神に感謝した。同じ日、彼は、モスクワに聖堂を建立することを布告で約束した。「敵からのロシアの救済は……ロシアに注がれた神の慈悲である。……この困難な時代にロシア国民が発揮した信仰と祖国に対する比類なき献身と忠誠、愛を永遠に記憶し、ロシアをその脅かされていた破滅から救った神の御心への我々の感謝の印に、余は、我々の古都モスクワに救世主キリストのために教会を建立する」。<sup>(13)</sup>

以下、ヴィトベルク自身の後年の覚書と自伝<sup>(14)</sup>により経緯を追いながら、彼とアレクサンドルの建築への姿勢を明らかにする。

彼は聖堂に関するアレクサンドルの先の声明に感銘を

受けた。「ロシアの栄光の記念碑として、ロシアの救済に対する」神への「祈りと感謝の印として」キリストのために聖堂を建立するという考えにである。「救世主キリストのための聖堂！ 新しい考えだ」。彼によれば、聖堂は、祝日や聖人ではなく、キリストそのものに捧げられた点で、従来の教会と一線を画す。彼はこの考えに「皇帝の高いキリスト教的熱意」を見た。<sup>(15)</sup>

このころ、ヴィトベルクは、無名な画家という理由で恋人の親に結婚を反対され、出世を欲していた。一方、多くの人が聖堂の設計を考え始めていた。一八一三年六月に、彼も自分の考えを形にするため、休暇をとってモスクワへ向かった。彼はこの設計によって建築を勉強していく。また、フョードル・ロストプチン（一八一二～一四モスクワ総督）の依頼で「一八一二年」を題材とする絵を描き、関係者と会い関心を深めた。<sup>(16)</sup>

彼の計画は、一八一五年の夏に、元法務大臣で詩人のイヴァン・ドミートリエフなどに認められた。国民教育大臣（一八一〇～一六）であったアレクセイ・ラズモフスキーは、「これは建築の新しい詩だ」と絶賛した。

ヴァイトベルクは、一八一六年一月三十一日、二九歳の時に  
 絵画部門のアカデミー会員となる。彼の聖堂計画が採用  
 されたのはこの年のことである。建築案を集めるように  
 命じられていたゴリツィン（一八一六～一七 宗務院総  
 裁）が、アレクサンドル一世に彼を仲介した。ヴァイトベ  
 ルクは、ゴリツィンの官房でアレクサンドルが諸案を檢  
 討する際に、自ら説明するために呼ばれた。官房の机に  
 は、新古典主義のそうそうたる建築家の諸案が置かれて  
 いた。ペテルブルクのエルミタージュ劇場、ツァールス  
 コエーセローのアレクサンドル宮殿などで知られるイタ  
 リア出身のジャコモ・クアレンギ、ペテルブルクのカザ  
 ン大聖堂を設計したアンドレイ・ヴォロニーヒン、一八  
 一二年の大火後のモスクワ再建で中心的役割を果たすイ  
 タリア系のジョゼフ・ボーヴェなどである。<sup>15)</sup>

このときアレクサンドルはヴァイトベルクに、「あなた  
 の解説を聴くのを心待ちにしていた」と語り、しばしば  
 彼の目を見ながら、注意深くその言葉に耳を傾けた。彼  
 の言葉を引用しよう。「私は熱心に説明しながら、「図面  
を指さす」陛下の手を動かした。熱中しすぎて、お詫び

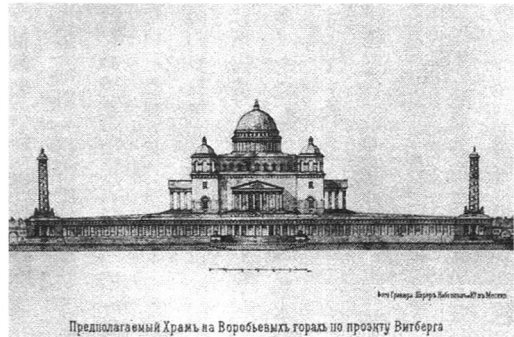


図2 ヴァイトベルクの救世主ハリストス大聖堂計画  
 (1817年) Кириченко. Указ. соч. С. 28.

をするのさえ忘  
 れていた……。  
 説明し終わる前  
 に、私はアレク  
 サンドルの目に  
 浮かぶ涙に気づ  
 いた」。これは  
 彼にとつて「勲  
 章や評価には代  
 えがたい最高の  
 褒美」であつた。  
 アレクサンドル  
 はこう言ったという。「私はあなたの計画がたいへん気  
 に入つた。あなたはこの聖堂についての私の願いを押し  
 量り、私の考えを叶えた。私はそれが、通常の建築のよ  
 うな単なる石の塊ではなく、何らかの宗教的思想を表す  
 ものとなることを願っていた。しかし私はこのようなこ  
 とが叶えられるとはまったく期待せず、だれかがそのよ  
 うな熱意に動かされるとも期待せず、ゆえに自分の願い

を隠していた。いま私は二〇に及ぶ提案を検討した。その中にはとてもよいものもあったが、すべて普通の建築だ。だが、あなたは石に語らせた」。

ヴィトベルクは、自分は設計をさらに練ることに専念し、建設は他に委ねたいと考えていたが、アレクサンドルは彼に計画を自ら実現するように命じた。その後、彼はモスクワで結婚し、その後建立地に関してアレクサンドルに謁見し、別の日、雀ヶ丘で計画を説明した。さらに翌一八一七年の夏にペテルブルクで、練り直した計画(図2)を報告し、一八一七年一〇月一二日の定礎式を迎えた。同日、八等文官に任じられ、年末には、国民感情に配慮したいというアレクサンドル一世の希望で、ルター派から正教に改宗した。その後彼の予算案が認められ、一八二〇年一〇月六日に彼を委員長として大聖堂建設委員会が設置された。彼は後に、最初の謁見の際にだろうか、アレクサンドルが手を握ってくれたことを辛い境遇の中で思い出すことになる。

彼の設計の主眼は次の四点にあつた。すなわち、巨大さ。独自性。キリスト教の思想を表現すること。「一八

一二年」の記念碑とすることである。

より詳しく見てみよう。第一に、「ロシアの偉大さにふさわしく巨大であること」。「壮大さと巨大さ」でサン・ピエトロ大聖堂(地上部一三七メートル)を超える必要がある。ヴィトベルクの聖堂の高さは地上部一七〇メートルであり、この巨大建造物が丘の上に建てられる。この巨大さの点で、彼の聖堂はすでに従来の正教会の規準を大きく外れていた。

第二に、「厳密に独創的な建築様式」。彼は、ロシアの既存の建築はヨーロッパの「生彩を欠く猿まね」でしかないと批判した。ピョートル大帝のヨーロッパ化改革以降のロシアの建築様式は、バロックから一八世紀末までに新古典主義へ移り変わった。それらを批判したのである。ただし、大聖堂は、基本的には新古典主義様式によつていた。

第三に、「聖堂のすべての部分が、建築の必要性にこだるだけの恣意的な形態」や、「巨大な死んだ石の塊」、「見事に配置された石の積み重ね」になることなく、「その一つ一つの石、すべての石が全体として、聖書の言

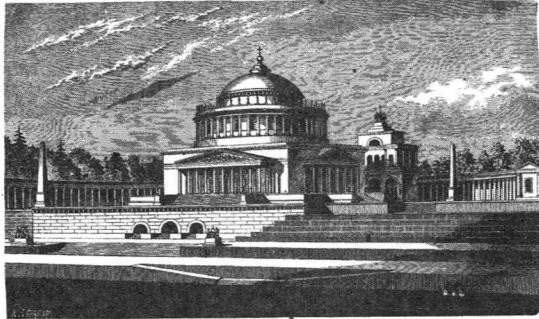


葉、聖書の文」であること。すなわち、キリスト教の思想を表現すること。ヴィトベルクがもつとも心を砕いたのはこの第三の点である。この点は、彼によれば、アレクサンドル一世の高い宗教性を叶えるためにも重要であった。「通常の聖堂が彼を満足させるだろうか？ 其中の多くは非常に洗練されてはいるが、しかし、何の宗教的な見解もなく作られている」。ヴィトベルクは聖堂のすべての外的な形態に、キリスト教的思想を込めた。<sup>26</sup>

彼が教派に関わりがない、普遍キリスト教的精神で考えていることは明らかである。彼自身が述べる。「聖堂はギリシャ・ロシア教会の必要に應えるだけでは不十分であり、一般的に全キリスト教の必要に應えなければならぬ」。彼にとつてこの点で重要なことは、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿つておられる」という使徒パウロの言葉、すなわち「人は生きた聖堂である」という教えであった。彼は、「人は身体、魂、精神という三つの要素から成る」という考えを聖堂によつて表現した。<sup>27</sup>

こうして、大聖堂は三層を為す三つの聖堂からなり、下層の聖堂は「死すべき身体 terra」を、中層は人の「魂 anima」を、上層は「不死の精神 spiritus」を表した。それぞれの「聖堂は、それぞれの聖堂の本質的な意味にふさわしい形をとる」。すなわち、下層の「身体の聖堂」は、短い辺を「限りなく短くした」長方形を成し、「魂のない身体」が横たわる棺を表す。中層の「魂の聖堂」は十字架の形をしている。十字架は、人が手を広げた姿であり、「死んだ身体」ではなく、「精神によつて生氣を与えられた身体」、人の「魂」を示す。上層の「精神の聖堂」は完全な円形をしている。これは、「円には始まりも終わりもない。永遠を表現するために最適な線である」という、一六世紀のイタリアの建築家アンドレア・パラーディオの言葉に基づき、円形は「不死の精神」にふさわしいという。さらに、「身体の聖堂」、「魂の聖堂」、「精神の聖堂」はそれぞれ、キリストの生涯の三つの時期、受肉、変容、復活に捧げられる。<sup>28</sup>

いま述べた三層の構成だけではなく、大聖堂の柱の形状や窓の数、内部の照明に至るまでもが、深い象徴的な



ХРАМЪ ХРИСТА СПАСИТЕЛЯ ВЪ МОСКВѢ,  
ПРОЕКТЪ АНДРЕЯ ВИТТЕЛКА.

図3 ヴィトベルクの救世主ハリストス大聖堂計画  
(1825年) Кириченко. Указ. соч. С.28.

で、ロシアの一七世紀までの教会とはもちろん、一八世紀の従来の教会建築とも異なった。ゲルツェンの言葉を借りれば、ヴィトベルクの計画にあふれるこのような「宗教的詩情」、彼を満たしていた「真実への靈感、彼の信念の神秘的な色彩」がアレクサンドルを驚かせ、その心を捉えた。<sup>(20)</sup> 大聖堂は、神聖同盟条約と同じ普遍キリス

意味を持つた。<sup>(20)</sup> 前述のように、ヴィトベルクの大型堂の建築様式は、基本的には、新古典主義である。しかしながら、大聖堂はその巨大さとこのような高い象徴性を備える点

ト教的精神を高々と表現したものとなるはずであった。第四に、聖堂は「一八一二年を記念する」。下層の「身体の聖堂」に、「自分の命を祖国のために捧げた一八一二年の犠牲者の記憶」、すなわち「豪華なカタコンベ」を置く。「祖国のために亡くなったすべての戦士を記憶し、兵士から軍の指揮官まで彼らの名をカタコンベの壁に刻む」。<sup>(30)</sup> 一兵卒までその名を記念するというこの計画は、「市民ミーニンとポジャルスキー公の像」の寄附者名簿が身分別ではなく地域別で記載されたことに通じる。

こうして大聖堂はロシア史上特異な聖堂となるはずであった。ヴィトベルクはその後も修正を加え、最終案は一八二五年のものである(図3)。この案では、上層の円形の聖堂の独立性が一層目立つようになった。<sup>(31)</sup>

雀ヶ丘は、この大聖堂の建立地として三つの点でふさわしかった。この地を提案したヴィトベルク自身が挙げたのは、次の二点である。第一に、視覚的効果。聖堂は威容を誇ることができる。雀ヶ丘は広々と開放的な小高い丘で、聖堂が街の建物の中に紛れてしまうことがな

い。対岸にはデヴィチの野が広がり、そこから、丘の上の聖堂の美しさ、「幾何学的外観」の全容を見ることが出来る。第二に、歴史的要因。雀ヶ丘は、ナポレオンが進軍してきたモジヤイスク街道と、退却したカルーガ街道の間に位置する。こうして、雀ヶ丘は、聖堂を目立たせ、かつまた、一八一二年の戦争を記念するのにふさわしい場所であった。だが、それだけではない。

第三に、いまひとつの点として、雀ヶ丘は象徴的で普遍キリスト教な、非伝統的聖堂にふさわしい。それはモスクワの伝統的中核地域ではなく、モスクワ川の向こう、モスクワの外れに位置し、ロシアの伝統とも正教会とも無縁の場所であったからである。ヴィトベルクは、「モスクワはあたかも大聖堂の足下に横たわる」と述べた。アレクサンドルは、このようにモスクワの中核地域を眼下に見る雀ヶ丘を「モスクワの王冠」と呼び、「それは私の場所だ」と言って、ヴィトベルクの提案を喜んだという。

「一八一二年」の後、モスクワは大火の被害があったところを中心に、ホテルブルクの最新の様式と同じ新古

典主義で復興が進んでいく。クレムリンに代表される伝統的モスクワを抱えながらも、モスクワは新古典主義建築が際立つ街へ変わりつつあった。前述のようにアレクサンドルは「市民ミーニンとポジヤルスキー公の像」にコスモポリタンのな表現を与えた。雀ヶ丘にそびえ立つヴィトベルクの大聖堂は、この新しいモスクワに普遍キリスト教的な意味を与えたであろう。それは、アレクサンドルが進めるモスクワ改造と、全ヨーロッパの精神的政治的大改造を志す彼の政策のまさに「王冠」であった。聖堂は、モスクワ解放五周年記念の一八一七年一〇月一二日に定礎式が行われ、一八二一年に起工となった。

### 三．ニコライ一世と「正教、専制、国民性」

二〇年代に入ると、アレクサンドルの外交政策は保守化し、憲法政策は停滞し、普遍キリスト教的政策は混乱し、破綻していった。一八二四年に宗教・国民教育省は廃止され、宗務院が復活した。ゴリツィンは罷免され、国民教育大臣に就任したのはシシコフである。彼の教育

方針によれば、国民教育は「ロシア的」である必要があり、全ロシアの異教徒はロシア語とロシアの歴史、法を学ぶ必要がある。教育に必要な道徳は「教会の外では見出せないものであり」、「教会に忠実な息子たち、忠実な臣民、神とツァーリに献身的な人々」の育成が課題である。神秘主義的普遍主義的な信仰は全面的に否定された。民族と教会を超えたアレクサンドルのコスモポリタンの態度からの一八〇度の転換であった。<sup>35)</sup>

さらに、一八二五年一月一日にアレクサンドルは四七歳の若さで、南方の地タガンロークで急逝した。熱病であった。彼の次弟コンスタンティン（ポーランド軍総司令官）が帝位を放棄していたことがおおよけとなっていなかったため、ワルシャワのコンスタンティンと、ペテルブルクにいた末弟ニコライの双方が互いを皇帝と認めて忠誠を誓いあう事態になったのち、ニコライが帝位に即いた。<sup>36)</sup> 新帝ニコライ一世は二月一四日にデカブリストの乱に見舞われた。デカブリストたちは、同日、元老院広場で行われる皇帝への宣誓式を妨害することを蜂起の第一歩として、憲法制定などを目指そうとするも、

失敗した。この乱の原因の一つは、立憲主義に配慮してきたアレクサンドル一世の改革意欲が二〇年代に衰微したことへの失望と、彼の死去にあつたと推測される。彼は一八二〇年までにワルシャワで密かに帝国憲法案を作成させていたが、これに、デカブリストに近いピョートル・ヴァゼムスキーが、少なくともフランス語の原文をロシア語へ翻訳する任務で関与していた。彼はデカブリストの一人ニコライ・トゥルゲーネフの兄アレクサンドルと、弟のセルゲイに憲法案の内容を明かした。<sup>37)</sup> この憲法案はしかし、アレクサンドル一世の政策の保守化に伴い、その後進展することがなかった。

ニコライ一世は即位当時二九歳であった。アレクサンドルとは年の離れた兄弟であり、アレクサンドルが祖母エカテリーナ二世のもとで育てられ、スイス人共和主義者ラールプの教えを受けたのに対して、ニコライは、母であるパーヴェルの妃、マリア・フョドロヴナの手下で育てられた。時にハムレットにたとえられる繊細なアレクサンドルに対し、彼は強い精神の持ち主であった。彼は元々保守的な上にデカブリストの乱に遭い、革命の

わずかな芽も摘み取ろうとし、厳しい検閲を敷いた。

フランス七月革命とポーランドの一月蜂起で始まる一八三〇年代には、動乱時代にモスクワがポーランドから解放された一六一二年と、一八二二年とが歴史小説で人気を博した。<sup>(40)</sup>一八三三年三月に国民教育大臣となったセルゲイ・ウヴァロフは、教育管区長たちへの回状において、「国民教育が正教、専制、国民性の一体化した精神で行われること」という指針を示した。<sup>(41)</sup>

彼の政策の一般的な原則は、同年一月のニコライ一世への報告に述べられている。アレクサンドル一世の治世においてもそうだが、このような報告の常として、側近は皇帝がすでに内々に承認した、あるいは承認すると期待できる内容を報告する。この報告も基本的にニコライが認めた内容であると考えてよい。<sup>(42)</sup>

ここでウヴァロフは、一八三〇年にヨーロッパ諸国で相次いだ革命的状况に鑑み、ロシアは独自の道を行くべきであると述べた。ただし、ピョートル大帝より前に戻ろうとしたのではない。「ヨーロッパの啓蒙、ヨーロッパの諸思想なしに我々はすでにやつていけない。しか

し、それらは、それらをうまく抑制することがなければ、不可避的な破滅によって我々を脅かす」。国民教育において必要なことは、「知性の指向を秩序と平穩の範囲にとどめ、一般的秩序を害するであろうあらゆるものを排除すること」である。ヨーロッパの影響でロシアに広がる「破滅的な諸原則」、「空想家」たちの「ヨーロッパ的形式への滑稽な執着」、「新規なものへの情熱」、すなわち、ヨーロッパをそのまま模倣することが、ロシア独自の「宗教的道徳的政治的諸概念」から「統一性」を奪ってきた。しかしいまやそれを守り、確固たるものとする必要がある。これは「猶予なしに決定する必要がある国家の課題」、「祖国の運命がかかっている課題」である。ウヴァロフがロシアの「強大化、幸福」だけでなく「存続」自体のために、つまり啓蒙主義の恩恵を受けつつ、ヨーロッパのような革命という破滅を避けるために守るべきであると思なす原則が、「正教、専制、国民性」であった。

ウヴァロフは「強力で博愛的で啓蒙的な専制」と述べた。彼は専制をヨーロッパ的価値観と結びつけて捉えて

いたことがわかる。彼はヨーロッパをそのまま模倣するのではなく、立憲主義や議會主義でないヨーロッパを望んだのである。<sup>(14)</sup>

国民性の内容は曖昧であり、それに関して述べられたのは、それが正教会と専制君主への忠誠と結びついた概念であるということのみである。<sup>(15)</sup> 国民性は「玉座と教会……を結びつける」ものであり、「国民性も専制もひとつの源から出ている」。ロシア独自の「宗教的・道徳的政治的諸概念」を「ロシアの国民性の神聖な残滓」と言い換えてもいる。正教会と専制への献身と国民性とは同義のようである。「国民性と専制は……ロシア国民の歴史の各ページにおいて結合している」ともいう。一方、国民性の概念は時代によって変化するものであり、「新旧の概念」の統一は困難であるとされた。国民性を全ロシア国民と結びつけるのか、ロシア民族と結びつけるのかはあいまいであり、一七世紀までのロシアの伝統や民族性と捉える見方を否定したわけではない。だが、同一視してもいいない。ウヴァロフの「正教、専制、国民性」の理念は、ロシア語やロシアの民族的伝統を特別に重視し

たシシコフの考えとは異なる。一方、ウヴァロフの考えはカトリックやルター派、セクト、立憲主義者などを排除し、アレクサンドル一世の憲法政策や普遍キリスト教的政策を全面的に否定するものでもあった。

このようなアレクサンドル一世からニコライ一世への政治の大転換が、大聖堂の計画を大きく左右することになる。

#### 四. トーンの大聖堂

ヴィトベルクの聖堂建設は当初から多難であった。建設はなかなか進まなかった。一八二四年にはゴリツインが宗教・国民教育大臣を解任された。彼はヴィトベルクの設計の背景とすべき普遍キリスト教的政策の推進者であり、ヴィトベルクの擁護者で、アレクサンドル一世との連絡役でもあった。ヴィトベルクはこの解任の煽りを受けた。一八二五年には、建築に必要な大きな石を運ぶためにモスクワ川とヴォルガ川を結ぶ勅令が下ったが、結局石は運べなかった。ヴィトベルクは不正を訴え

たが、彼自身が汚職を疑われた。<sup>(7)</sup>アレクサンドルが亡くなり、彼は頼み綱を失った。一八二七年、建設委員会が廃止され、ヴァイトベルクの計画は破棄された。一八二九年にニコライ一世は救世主ハリストス大聖堂のための新しい計画を募集した。一八三二年、ニコライは、トーンが描いた大聖堂の最終案を承認する。

新計画の募集当初、ニコライは雀ケ丘を放棄することにはためらいを示したが、建築に関する彼の好みは明らかだった。すでに彼はトーンを評価していた。一八二七年に遡ると、カリンキン橋の聖エカテリーナ教会（ペテルブルク）の設計コンペで入賞者がなかなか出なかったのは、ニコライが新古典主義的様式を好まなかったからである。一八三〇年に、美術アカデミー総裁アレクセイ・オレーニンが教区の聖職者に紹介したのが、トーンであった。彼はドイツ系の都市民の息子で、一八一〇年に美術アカデミーの建築部門を卒業し、一八二四年から二六年にはフランスとイタリヤへ留学した。一八三〇年に彼は聖エカテリーナ教会を伝統的要素を強調して設計し、採用された。同年彼はアカデミー会員となる。翌年

にはツァールスコエ・セローの教会をやはり伝統的要素を採り入れて設計し、その際、ニコライに拜謁した。<sup>(8)</sup>

一方、ヴァイトベルクは国庫に損失を与えた罪で、一八三五年にヴァトカへ流刑となった。

計画が進まず彼が責任を問われた理由として、彼のマネジメント・ミスによる財政破綻、関係者の不正や妬みが指摘されるほか、専門家の中からは、傾斜した土地に大建築を建てることへの疑問も上がっていた。<sup>(9)</sup>すでに述べたように、彼は建築で経験を積んでいなかった。美術アカデミーの建築家たちとは建築開始前から関係が悪化していた。<sup>(10)</sup>基本的には彼がアカデミーの建築家ではないどころか、建築の専門教育を受けておらず、従来の建築様式と異なったからでもあろう。

しかしなにより、彼の設計の背景である普遍主義的政策が破綻したこと、そして、ニコライ一世が普遍主義的教会の計画を破棄することを望んだことが、彼と計画の運命を決めた。<sup>(11)</sup>彼の建設事業が本格化した一八二一年には、すでにアレクサンドルの政策は保守化し、混迷を始めていたのである。

ハリストス大聖堂に関するトーンの設計は、玉ねぎ型のドームなど、ロシアの一七世紀までの、すなわち「伝統的」、「ロシア的」と見なされる正教会建築からの継承を強く印象づける。その立地として、トーンはヴィトベルクと異なり、聖堂自体が目立つ高所を選ばなかった。彼の聖堂はモスクワの中心部、クレムリンの隣にあり、聖堂の正教的要素の強調により、クレムリンとその内部のウスペンスキー大聖堂という一七世紀以前のモスクワの建築遺産と調和する。新聖堂のための建設委員会の長ミハイル・モストフスキーが一八八三年に発行した大聖堂に関するカタログにはこう記された。「建築の全体的性格は、陛下の意図にしたがい、古いロシアの教会を思い出させるものである」<sup>(32)</sup>。このようにトーンの設計はたしかに、「古いロシア」の様式、すなわち伝統的、かつ、民族的と認識されていた。

しかしながら、彼の建築は多くの点で、一七世紀までの伝統と無縁であった。まず、その巨大さである。さらに、その基本的構造は幾何学的形態と絶対的な規則性、厳格な均衡を特徴とし、新古典主義的であった。聖堂

は、上から見ると、伝統的聖堂に特徴的な、至聖所を収める後陣（聖堂の外に張り出した部分）を持たず、完璧に対称的な十字形をしている<sup>(33)</sup>。

建築上の伝統的表現は、円蓋の玉ねぎ型の形状、巨大なアルカトゥーラ（アーチの帯）、ザコマーラ（外壁上部の二本の柱の間の半円形ひさし状部分）、白い石の彫刻模様、遠近法を用いて規模を縮小しながら奥に引つ込む複数のアーチ状の段から成るポータル（入り口）という純粹に外面的、装飾的などころに限定される<sup>(34)</sup>。このような伝統的なデザインが、本質的に新古典主義的でヨーロッパ的な構造を飾る。この建築は一八三〇年代から二〇世紀初頭の折衷主義のひとつの分枝、ネオロシヤ様式のものであり、その第一段階であるロシヤニビザンツ様式の典型である。聖堂はヨーロッパ性を基本に備えながら、ただ完全にそれに従うのではなく、ロシア的な特徴を加えた。ヨーロッパ文明と歩調を合わせつつ、ロシアの独自性を守ろうとしたウシャコフの立場と通じる。さて、この大聖堂外壁の高浮彫は、新古典主義的構造の上にあって正教会と専制のつながりを強調し、建築上



の限られたロシア的伝統的表現を補う。その題材は、ニコライ一世の命令の下、モスクワ府主教フィラレートにより一八四四年に選ばれた。制作は美術アカデミーの教授たちに命じられた。外壁の高浮雕は一八四六年に制作が開始され、設置はアレクサンドル二世の治世、一八六三年となる。<sup>(6)</sup>高浮雕は上層と下層にあり、上層はザコマララの中に、下層はポータルアーチの上辺などに置かれた。

西側の正面ファサード上段の中央ザコマララには救世主キリストの像が、他の三面の中央ザコマララには聖母像が刻まれた。南側にはスモレンスクの聖母像。クトウゾフの命令により、八月二六日のポロジノの戦いの前日に、軍とともにあつたのもそれである。<sup>(7)</sup>東側には、ポロジノの戦いの日が祝日であるウラジーミルの聖母像。北側にはイヴィロンの聖母像。これは、赤の広場に面する復活門の小礼拝堂にあつたイヴィロンの聖母像を範とする。この小礼拝堂（一六六九年創建）は一八一二年に焼失した後に再建された。<sup>(8)</sup>

西側正面ファサードの上段の四つの小ザコマララには

アレクサンドル一世と二世、ニコライ一世、アレクサンドル一世妃と二世妃を意味する四聖人が置かれた。<sup>(9)</sup>こうして彼らが神に守られていることを示した。下段の右手角には、ダヴィデの玉座に即くソロモン王、左手角には、ソロモンに神殿の図面を渡すダヴィデ。こうして専制君主による大聖堂の建設が、聖書に収められた物語になぞらえられた。

この正面ファサードが向く西側から、一八一二年にナポレオンは大軍を引き連れてきた。その下段、中央ポータルのアーチには、「万軍の主は我らと共におられる」と詩編の一節が書かれた羊皮紙を持つ二天使。一八一二年八月一四日にモスクワの義勇軍がモジャイスクに向けて出発したことの記念である。<sup>(10)</sup>右手ポータルのアーチに刻まれた教会旗を十字に持つ二天使は、モスクワ義勇軍が軍旗の代わりに教会旗を持ったことを記念した。こうして一八一二年の勝利は神と教会がもたらしたと表現された。

南側ファサードは、一八一二年の戦争を勝利に導いたいくつかの戦いの場に向く。<sup>(11)</sup>上段の前述のスモレンスク

の聖母像の両側の四つの小ザコマールには、一〇月六日のタルチノの戦いや一〇月二日のマロヤスラヴェツの戦いなどを記念する四聖人が描かれた。下段の中央ポータルアーチには、総司令官ミハイル・クトゥーゾフの守護天使「大天使ミハイル（ミカエル）」が（主の軍の將軍として）イースス・ナヴィン（ヨシユア）のもとに現れた図がある。こうして、聖母と天使、聖人によって「一八二二年」がキリスト教的に表現され、神と教会による勝利という意味づけが一層強まった。右手角には、エラムの王たちに勝利したアブラハムがメルキゼデクによって迎えられている図、左手角には、ゴリアテに勝利した後ダヴィデが女性たちの歓喜に迎えられている図が描かれた。こうして、「一八二二年」の神による勝利が聖書の物語になぞらえられる。

一八一三年と一四年のヨーロッパでの戦いについては、北側ファサード上段のイヴィロンの聖母像の両側の四つのザコマールに、四つの戦いを示す聖人たちが刻まれた。一八二二年に比べて、ヨーロッパでの勝利への関心は相対的に低い。



図4 「ボジャルスキー公と市民ミーニンを祝福する聖ディオニシイ」  
（現在の大聖堂北側の高浮彫。2019年3月筆者撮影）

クレムリンに臨む東側ファサードの下段には、モスクワ府主教聖ペトルと聖アレクシイをはじめとして、聖セルギイ（三位一体聖セルギイ修道院創建者）などモスク

ワ大公国ゆかりの列聖された聖職者たちと、初代モスクワ公ダニールなどが刻まれた。こうして、教会と共に歩んだロシアの歴史が描かれる。

北側下段右手の小ポータルアーチには、九八八年にビザンツから正教を受容したキエフ大公ウラジーミル（聖公）と、すでに一〇世紀半ばに洗礼を受けていたその祖母オリガ大公妃、左手小ポータルアーチに、キリスト教を公認したビザンツ皇帝コンスタンティヌス大帝とその母ヘレナ。キリスト教の受容に関して、ロシアとビザンツ帝国の歴史を並行して示した。この北側下段の角の右手に、タタールとのクリコヴォの戦い（一三八〇年）に向かうドミトリー・ドンスコイ大公を祝福する聖セルギイ。左手に、「モスクワのポーランド人からの解放を期して、ポジャルスキー公と市民ミーニンを祝福する聖ディオニシイ」の図（図4）がある。美術アカデミー教授アレクサンドル・ロガノフスキー（一八一〇—一五五）の作品であり、ニコライ一世の晩年にあたる。この「ポジャルスキー公と市民ミーニンを祝福する聖ディオニシイ」の図を、一八一八年にアレクサンドル一

世によって設置された赤の広場の「市民ミーニンとポジャルスキー公の像」と比較しておこう。

前述のようにアレクサンドル一世は一八一二年に民族的伝統的ロシアのシンボルとしてポジャルスキーとミーニンを利用したものの、赤の広場の一八一八年の像においては、二人はローマ風に装い、いわば「世界市民」として描かれた。一方、この大聖堂の高浮雕においては、衣装はロシア風である。

一八一八年の像では、ミーニンが立ち、彼がポジャルスキーに指揮をとるように促していた。大聖堂では、ミーニンはへりくだり、中央に立つのはポジャルスキーである。専制を支える身分制の原理が尊重されたことがわかる。「ミーニンとポジャルスキー」ではなく、「ポジャルスキーとミーニン」の表記であることは象徴的である。なお、完成した大聖堂の内部に掲げられた戦死者の名も士官に限られた。

ポジャルスキーの重視は当時の一般的傾向と一致する。一八世紀後半以降、ポジャルスキーを重視する詩や戯曲が多い中、一九世紀初頭には、ミーニンを「市民」

として礼賛するボブロフの詩に代表されるようなりペラルでコスモポリタンな立場もあり、ミーニンの存在感はそれ以前よりも増していた。しかし、ニコライ一世の治世には、ミーニン重視の論調は影を潜めた。一八二六年五月に亡くなったニコライ・カラムジンの遺稿を元に一八二九年に出版された『ロシア国家史』第一二巻には、ボジャルスキーは登場するが、ミーニンの名はない。一八三二年のペテルブルクのアレクサンドリンスキー劇場の柿落公演は、マトヴェイ・クリュコフスキーの『ボジャルスキー』（一八〇七年<sup>(6)</sup>）であった。ミーニンも登場するものの、主役はボジャルスキーである。

このように一八一八年とは異なり、大聖堂の高浮彫においては、ミーニンではなくボジャルスキーが重視されたのだが、最大の相違は、一八一八年にはミーニンとボジャルスキーの二人だけで絵は完結していたが、大聖堂の高浮彫では聖職者が参加しただけではなく、際だった存在感を得た点である。タイトルにおいても焦点は聖ディオニシイ（三位一体聖セルギイ修道院長）に置かれている。こうして、ロシアの歴史において正教会の聖職

者が外敵との戦いに大きな役割を果たしたことが表現された。このような伝統的物語がヨーロッパの骨格のうえに語られた。

こうして、大聖堂はヴィトベルクのものとは異なり、普遍キリスト教の思想を表現したものである。市民概念への配慮を示したものでもなくなった。大聖堂はその裝飾によって、正教会に支えられた専制、外敵に対するロシア正教会の勝利を高く知らしめ、賛美するものとなった。その一方、その構造においてはヨーロッパ建築であったことをいま一度確認しておく。それはウヴァロフの「正教、専制、国民性」の原則に合致していた。

この巨大な大聖堂は、アレクサンドル三世の治世、一八八三年によくやく聖別式を迎える。なお、寄付もあったが、資金建設の費用は、ほとんど国家が負担した。<sup>(6)</sup>

## 五. スアーニンと民族衣装

ヨーロッパ建築の骨格のうえに際立つ民族的伝統的裝飾という組み合わせに通じる二つの例を挙げておこう。

ニコライ一世の時代、ミハイル・ロマノフの居場所についてポーランド兵に嘘を教えて君主の危機を救ったという農民イヴァン・スサーニンの表象が重要性を帯びた。<sup>(6)</sup>一八三六年一月二七日、ペテルブルクのポリシヨイ・カーメンヌイ劇場において、スサーニンを主人公としてミハイル・グリнкаが作曲したロシア語のオペラ『ツァーリに捧げた命』が初演され、大成功を収めた。<sup>(7)</sup>ロマノフ派の詩人で皇太子の傅育官であったヴァシリ・ジユコフスキーがグリнкаにこのテーマを勧めた。<sup>(8)</sup>

このオペラで、スサーニンは自分の娘の婚礼を全国会議におけるツァーリの選出まで延期し、ミハイル・ロマノフ選出の知らせを聞くと、自分の養子にツァーリに仕えるように命じる。そして、攻め入ったポーランド軍が新しいツァーリの隠れ家に案内するように彼に強い時、彼は、ツァーリの家は「神の要塞に取り囲まれ」、そのもとにロシアの軍が集結している、と言う（第三幕第六場）。スサーニンはポーランド人を沼や森に連れて行き、道に迷わせ、感づいた彼らにより殺害される。国

民は皇帝のために生き、死ぬという理念が描かれた。そして、エピローグでジユコフスキーの詩による合唱「栄えあれ」により、赤の広場で国民が皇帝と王朝を称える。「栄光あれ、我らがロシアのツァーリよ！ 神が我らに与えたもう、我らが支配者よ！ 王朝よ、永久に！ 王朝によりロシア国民に栄えあれ！」<sup>(9)</sup>

このオペラは「正教、専制、国民性」の原則を表現していた。その国民性は、スサーニンがヨーロッパ化された貴族ではなく農民であることにより、民族性に近づくことはたしかである。オペラにはロシア民謡がとりいれられ、印象的なロシア的場面がある。その一方、民謡に直接基づく声楽曲は一部であり、多くの声楽曲はイタリア的要素を持ち、ロシア的要素は、不規則なフレーズと長短調の交代などに限られた。<sup>(10)</sup>音楽は、基本的にヨーロッパのものである。

いまひとつの例を挙げる。一八四八年の「諸国民の春」の翌年、復活祭のモスクワで、トーンが設計し完成したネオロシヤ様式の建築、クレムリン大宮殿の聖別式が行われた。四月九日と一一日には仮面舞踏会が催さ

れた。イギリスのほか、ポーランドなども含むロシア帝国の様々な地域の代表者、さらに、スサーニンのほか、ポジャルスキーとミーニン、モスクワ大学創設者ミハイル・ロモノソフ、イエルマークというロシアの歴史上の人物に扮した貴族たちが行進や舞踏を楽しんだ。<sup>22</sup>

小説家のセルゲイ・アクサーコフはペテルブルクの息子イヴァンへの書簡の中で、仮装舞踏会について、「新旧ロシアの民族衣装に身を包む祝祭」であると書いた。ボリス・シェヴィリヨフはこう記した。「新旧全ロシアの衣装の豊かな外見と多様性」を皇帝と帝室のメンバーに見せるといふ「モスクワの貴族たちの一致した望み」が叶った。「厳しく思慮深い我らが君主の瞳がこのロシアの祝日を楽しんだ。明るい微笑から、彼のロシアの心が喜んでいとわかった」。<sup>23</sup>

しかし、スラヴ派とニコライ一世の考えの相違が次の逸話から明らかになる。

スラヴ派はその祝祭をきっかけに「ロシア服」に夢中になった。モスクワでは、スラヴ派のアレクセイ・ホミャコフと、前述のセルゲイの息子で同じくスラヴ派の

コンスタンチン・アクサーコフたちがあごひげを伸ばし、「ロシアの」服装を身につけた。セルゲイ自身もそうした。すると、内務省から、各貴族団長へ回状が発せられた。「最近すべての県から、あごひげを蓄えるものがたいそう増えたという報告があったが、陛下は、ロシア貴族があごひげを蓄えることを好ましくないとお考えである。ヨーロッパであごひげは、一定の思想様式の印、看板である。……あごひげは、貴族が選出により勤務することを妨げるであらう、と陛下はお考えである」。<sup>24</sup> あごひげを蓄えた貴族を貴族集会で役人として選んではいけないというのである。あごひげは当時ヨーロッパではユダヤ人が過激派を意味した。<sup>25</sup>

この回状はアクサーコフたちを落胆させた。コンスタンチン・アクサーコフはこう書いた。「ロシア服にはあごひげが不可欠だ」。「あごひげの禁止はロシア服の禁止を意味する」。「陛下はしばしばロシア的感情に言及され、回状そのものにおいても、ヨーロッパの真似をすることに對する怒りを述べられているのかかわらず、ロシア服に陛下が反対なさるとは、私には信じがたい」。<sup>26</sup>

ニコライはロシアの歴史と伝統を重視した。しかし、それは、貴族があこひげを蓄えることではなかった。ロシア化は、ヨーロッパの規準をあくまでも守りつつ行われるべきであった。<sup>(1)</sup>すでに述べたように、ウヴァロフは、啓蒙主義を基本的に認めつつ、その弊害を除こうとした。トーンの建築においてそうであったように、ロシアの伝統は強烈なデザインではあったが、構造ではなかったのである。

ニコライ一世もウヴァロフもヨーロッパの規準を土台とした。しかし、アレクサンドル一世のナポレオン戦争後のコスモポリタンの政策の全面否定であることを確認しておこう。ウヴァロフの「正教、専制、国民性」の理念が正教徒以外のキリスト教徒や立憲主義者を排除したのに対し、アレクサンドル一世は、専制君主ながら、立憲君主制の理想を理解し、とくに外交においてそれを推進した。正教会を尊重せず、教派を超えた普遍キリスト教的理想の実現を目指した。このことが、救世主ハリストス大聖堂の二つの計画に如実に表れている。

## 註

- (1) О Храме // Сайта Храма Христа Спасителя — <http://new.hhs.ru/about/> (25 ноя. 2019 г.)
- (2) Киряченко Е. И. Храм Христа Спасителя в Москве: История проектирования и создания собора: Страницы жизни и гибели, 1813-1931. М., 1997. Wortman, Richard S. *Servants of Power: Myth and Ceremony in Russian Monarchy: From Peter the Great to the Death of Nicholas I*. Princeton, 1995. pp.236-238. 381-387. Sidorov, Dmitri. "National Monumentalization and the Politics of Scale: The Resurrections of the Cathedral of Christ the Savior in Moscow". *Annals of the Association of American Geographers*. Vol. 90, No. 3, 2000. pp.548-572. 畠山禎「神への感謝と英雄の顕彰——対ナポレオン「祖国戦争」後のロシア」, 若尾祐司, 和田光弘編著『歴史の場——史跡・記念碑・記憶』, ミネルヴァ書房, 二〇一〇年, 一七三—一九三頁。
- (3)アレクサンドル・ケルツェン(金子幸彦, 長縄光男訳)『過去と思索』第一巻, 筑摩書房, 一九九八年, 三三六—三三九頁。
- (4) Полное собрание законов российской империи с 1649 года. Т.32. СПб., 1830. С.388, 425-426 (далее—ПСЗРИ).

- 拙稿「一八二二年の退却とアレクサンドル一世の声明——ナポレオンの戦争」考』『ロシア史研究』第九三号、二〇一三年、三〇—三四頁（以後、池本〔二〇一三〕）。
- (5) Шишков А. С. «Рассуждение о любви к отечеству, читанное в 1812 (sic.) году в Беседе любителей русского слова» // *Собрание сочинений и переводов адмирала Шишкова*. СПб., 1825. Ч.4. С.147-188. 拙稿「ロシア皇帝アレクサンドル一世と「市民ミーニンとホジャルスキー公の像」」、井内敏夫編『ロシア・東欧史における国家と国民の相貌』、見光書房、二〇一七年、一五二—一五三頁（以後、池本〔二〇一七〕）。
- (6) 池本〔二〇一三〕、一四—一六頁。拙稿「ロシアにおける世論政策の試み——ナポレオン戦争を背景として」森原隆編『ヨーロッパの政治文化史——統合・分裂・戦争』誠文堂、二〇一八年、二三五頁（以後、池本〔二〇一八〕）。
- (7) 拙書『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』風行社、二〇〇六年、序論第二章、第一部第二章（以後、池本〔二〇〇六〕）。
- (8) Министерство иностранных дел СССР. *Внешняя политика России XIX и начала XX века*. М., 1972. Т.8. С.502-504. 池本〔二〇一七〕、一五四—一五五頁。ウォートマンは、従来の解釈にしたがい、アレクサンドル一世は治世前期に目指した立憲主義的改革を断念し、代わりに臣民の精神的幸福を目指した」と見なす。Wortman, op. cit., p.225.
- (9) 池本〔二〇一八〕、二三三—二三五、二三七頁。山本俊朗『アレクサンドル一世時代史の研究』早稲田大学出版部、一九八七年、一三五、一三九頁他。
- (10) Бобров С. С. «Патриоты и герои, везде, всегда и во всяком» // *Лицей*. СПб., 1806. Ч.2. К.1. С.22-51. 池本〔二〇一七〕、一四五—一六四頁。
- (11) Кириченко. Указ. соч. С. 11-12 の引用に於て。
- (12) Петров. П. Н. Предисловие к «Запискам академика Витберга, строителя Храма Христа Спасителя в Москве / примеч. П. Н. Петрова» (далее—Записки) // *Русская старина*. СПб., 1872. Т. 5. No.1. С.17-18; Кириченко. Указ. соч. С.24-25, 31.
- (13) ПСЗРИ. Т.32. С.486-488. 池本〔二〇一三〕、一六頁。
- (14) Записки. Т. 5. No.1. С.16-32, No.2. С.159-192, No.4. С. 519-582.
- (15) Витберг А. Л. Автобиография А. Л. Витберга // *Русская старина*. СПб., 1876. Т. 17. No. 9. С. 110-125 (далее—Автобиография).
- (16) Записки. No. 1. С.19-20.



- (17) Петров. Указ. соч. С.18-19; Записки. No. 1. С.21, No.2. С.175.
- (18) Записки. No. 2. С.159-161, 166, 171-174; Применение Петрова. Там же. С.171; Мостовский М. С. (сост). *Историческое описание храма во имя Христа Спасителя в Москве по поручению высочайше учрежденной комиссии для построения храма, на основании ижекихих документов*. М., 1883. С.4.
- (19) Записки. No. 2. С.174-175.
- (20) Там же. С.172-192, No.4. С.523; Виноградов А. В. *Историческое описание храма во имя Христа Спасителя в Москве*. М., 1869 (переиздано 2013 г.). С.7.
- (21) Керлзонен. 前掲書。三四七頁。
- (22) Автобиография. С.110; Записки. No. 1. С.20; Кириченко. Указ. соч. С.31; Sidorov, op. cit., p.557.
- (23) Автобиография. С.110; Записки. No. 1. С.20.
- (24) Боринцоваはウイトヘルタの構想を古典主義の極端を表現と見なす。Борисова Е. А. *Русская архитектура второй половины XIX века*. М., 1979. С.105-106. Кириченкоは、ウイトヘルタが古典キリシヤの建築様式の上品さ、単純性を好んでいたと指摘し、大聖堂の様式は
- 基本的には古典主義であるが見なす一方、従来の建築にならぬような象徴性、建築が示す思想に建築様式を合致せよとせよとせよとせよとせよ、ロマン主義建築に特有のものではない、と論じて。Кириченко. Указ. соч. С.31-32.
- (25) Автобиография. С.110; Записки. No. 1. С.20, 25.
- (26) Там же. С.21, 25-26; Автобиография. С.110; Мостовский. Указ. соч. С.5.
- (27) Записки. No. 1. С.26-30.
- (28) Кириченко. Указ. соч. С.31.
- (29) Керлзонен. 前掲書。三三八、三四一頁。
- (30) Записки. No. 1. С.28.
- (31) Кириченко. Указ. соч., С.31.
- (32) Записки. No. 2. С.183-184.
- (33) Sidorov, op. cit., p.554.
- (34) Записки. No. 2. С.183-184.
- (35) 砲台 [一一〇一七]。一五カー一五九頁。
- (36) Кириченко. Указ. соч. С.33; Записки. No.2. С.197.
- (37) «Предложение главному правлению училищ министра народного просвещения Шишкова. 11 декабря 1824 г.» // *Собрание распоряжений по Министерству народного просвещения*. СПб., 1866. Т. 1. С. 531-538. 池本 [一一〇一七]。一六〇頁。

- (38) この間の経緯は、山本、前掲書、二〇一―二三九頁。
- (39) 池本 二二〇六頁、一七八―一八二頁。
- (40) Зорин А. *Кормя двуглавого орла: Русская литература и государственная идеология в последней трети XVIII - первой трети XIX века*. М., 2001. С.161-162.
- (41) «Пиркульное предложение г. управляющего Министерством народного просвещения начальствам учебных округов, о вступлении в управление министерством, 21 марта 1833 г.» // *Журнал Министерства народного просвещения*. Ч.1. СПб., 1834. С.ХЛХ-Л (далее - *Журнал МНП*).
- (42) Уваров С. С. «О некоторых общих началах, могущих служить руководством при управлении Министерством народного просвещения. 19 ноября 1833 г.» // *Река времен: Книга истории и культуры*. Книга 1. М., 1995. С.70-72. Ср.: «С представлением отчета тайного советника Уварова по обозрению им Московского университета и гимназий. 4 декабря 1832 г.» // *Сборник постановлений по Министерству народного просвещения*. 2-е изд. СПб., 1875. Т.2. Отделение 1. С.511; «Прямобудль» // *Журнал МНП*. Ч.
1. С. III-VII.
- (43) Зорин. Указ соч. С.342-343.
- (44) Там же. С.367-368.
- (45) Там же. С.366.
- (46) Там же. С.350.
- (47) ナルシホン、前掲書、三四三―三四四頁。Киряченко. Указ. соч. С.37.
- (48) Там же. С.40-41; Славина Т. А. *Константин Тон*. Л., 1989. С.34-38; Wortman, op. cit., pp.382-384.
- (49) Sidorov, op.cit., p.555; Киряченко. Указ. соч. С.37-38. ナルシホン、前掲書、三四三頁。
- (50) Записки. No. 2. С. 166-171, 175-179. ナルシホン、前掲書、三四七頁。Автобиография. С.111.
- (51) Sidorov, op. cit., p.555. ナルシホン、前掲書、三四二―三四四頁。
- (52) Киряченко. Указ. соч. С.44; Борисова. Указ. соч. С.106.
- (53) Мостовский. Указ. соч. С. 29.
- (54) Sidorov, op. cit., p.557; Борисова. Указ. соч. С.108; Wortman, op. cit., pp.384-385.
- (55) Борисова. Указ. соч. С.108-109; Wortman, op. cit., pp.384-385.

- (56) Виноградов. Указ. соч. С.36-38. 以下の外壁高浮彫に關する説明は、特記のないかぎり、この史料による。
- (57) Там же. С.36, 40.
- (58) トルストイの『戦争と平和』(第三部第二篇二一)にも描かれてゐる。
- (59) さらにソ連時代に破壊され、ソ連崩壊後に再建された。
- (60) Кириченко. Указ. соч. С.74.
- (61) Мосстаф 義勇軍について Глинка С. Н. «К воинам московской силы, вышедшим в поход 14-го августа» // И. А. Айзикова и т.д. (ред.), *Собрание стихотворений, относящихся к незабвенному 1812 году*. М., 2015. С.259, 577.
- (62) Sidorov, op. cit., pp.557-558; Кириченко. Указ. соч. С.74.
- (63) Виноградов. Указ. соч. С.38-40.
- (64) Кириченко. Указ. соч. С.29.
- (65) Карамзин Н. М. *История государства Российского*. Т.12. СПб., 1829; Крюковский М. В. *Пожарский (Праздник в трех действиях)*. СПб., 1807. 池本「二〇一七」一四七―一四九頁。
- (66) Кириченко. Указ. соч. С.130.
- (67)すでに一八一二年に、セルゲイ・グリンカが「ササーニンの逸話を取り上げ、一八一五年にはポリシヨイ・カーメ
- ンヌイ劇場において、アレクサンドル・シヤホフスキー脚本、カッテリーノ・カヴォス作曲「イヴァン・スサーニン」が初演されていた。一八二二年にはコンドラティ・ルイレーエフ(デカブリスト)が「イヴァン・スサーニン」の詩を書いた。
- (68) 越野剛「戦争の記憶とナロードの英雄―イワン・スサーニンの物語」、野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチエコ、井上まどか編「ロシア文化の方舟―ソ連崩壊から二〇年」、東洋書店、二〇一一年、二四〇―二四八頁。農民が貴族同様に皇帝のために死ぬという物語は、農民の立場の変化を反映している」と論じる。
- (69) フランシス・マース(森田稔、中田朱美、梅津紀雄訳)『ロシア音楽史―「カマーリンスカヤ」から「バービイ・ヤール」まで』春秋社、二〇〇六年、三二―三五頁。《Розен, Егор (Георгий) Фелорович》// *Русский биографический словарь*. СПб., 1913. Т. 16. С. 399-403.
- (70) マース、前掲書、三六―四一頁。Розен Г. Ф. *Жизнь за царя. Музыка М. И. Глинки*. М., 1885.
- (71) マース、前掲書、三九―四一頁。森田稔「ロシア音楽の魅力―グリンカ・ムソルグスキ―チャイコフスキー」東洋書店、二〇〇八年、三二頁。

- (72) Барсуков Н. *Жизнь и труды М. П. Погодина*. СПб., 1896. Т.10. С. 242-50.
- (73) Там же 244頁引用。
- (74) Там же. С.250-51, 253 244頁引用。
- (75) Вортман Р. «Официальная народность» и национальный миф российской монархии XIX века»  
// *Культурные практики в идеологической перспективе: Россия, XVIII - начало XX века*. М., 1999. С. 233-244; Барсуков. Указ. соч. С.250-251.
- (76) Там же. С.251-252 244頁引用。
- (77) ウォーヘイムの言葉によれば、「民衆の文化に基づいたエリートと民衆の接近」をニコライは目指さなかった。  
Вортман. Указ. соч. С. 233-244.